

向ひて、石井の抜は、まだ十分ならず、その一言の唇を漏れしを、
遺恨におもはれて、竟に赤堀に暗殺せられさ。是なん、世にいふ龜
山復讐の原因なりける。

夕霧墓 (延寶)

下寺町の淨國寺本堂東北手南回きにありて、正面には、花岳芳春信
女とあり、右側には、再建の由をしるし、左側には、鬼貫が「この
墓は柳なくともあはれなり」の句をゑり、その下に、夕霧墓と記し
、裏に、「延寶六戊午正月六日俗名あふぎや夕ぎり」とあり。その
他、臺石に至るまで、鐫字には、悉皆朱を加へたり。新町廓九軒の
吉田屋より、鎮へに追善いとなひよし、寺僧は語れり。吉田屋には、

今も夕霧が着慣れし裱襦と「伊泡、きりか」の手簡とを藏せり。著
作堂一夕話に記せるは、再建以前の墓なれば、今のは、大に換れり

椀久墓 (延寶)

八丁目寺町の實相寺本堂南横手松樹の下にありて、西向きなり。石
極めて粗末にして、表に、宗達居士墓とあり、別に石を建て、椀久
之墓、と標示せり。これが追善を營むは、天満の古衣舖川島佐祐と
いふ人にして、孟蘭盆會ごとに、心ばかりの手向するよし、寺僧は
かたりき。釋旅漫録に、

元日 金歳越といふ義太夫本に、椀久と、ひやうたなかしく、と
玉屋庄七が事を混合して、作れり。又小歌につくりし椀久物狂ひ

はひやうたんかしくが事なり。
と見たり、類によりて、茲に採録す。

西山宗因墓 (天和)

宗因は、もと肥後加藤家の臣下なりき。西山氏、名は豊一、通稱を二郎作といふ。俳號多し。梅翁、梅花翁、野梅翁、西翁、一幽子、忘吾齋、向榮庵、有芳庵等の號あり。はじめ連歌を昌孫にまなび、俳諧は、荒木田守武の風を慕ひ、又紹純の門に入り、一家の格調を創始せり。松江維舟と交り深かりき。著述の俳書に、二十日草、四人法師、十會集、たうがらし百韻、両吟集、獨吟集、ひるかみ、等あり。天和二年、壬戌三月二十八日に歿して年七十八なりき。遺骸

をば、江戸谷中日暮里の養福寺に葬れり。浪華にては、貞享二年(四年を闕て)嗣子宗春。一家累代の墓碑を、天満寺町西福寺に建て、正面の中央に、翁の法名を鐫り入れたり。「實省宗因法師觀光昌察處士」とあるぞ、是なる。高さ五尺、幅二尺にあまりたる大碑なり、今に、同寺本堂西南隅西向に存せり。宗因の配は、法印探幽の女なり。同時東に、松尾芭蕉あり、洛に池西言水ありて、一時鼎立の姿をなせり。

江戸俳談林七世一陽井谷素外、その藝祖梅翁が天満に住まひし因みによりて、石を天神社内文庫前に建て、表に

宵のとし雨ふりける元日に

そのどころにありしが、前年洪水の節、ながれ失せにき。來山の遺址なる今宮の十萬堂は、以前伊藤三甫といふ人、私財をなげうちてこれを守れりしが、同人が市中に引越してより、庵は、他人の手に渡り、今はたい、名のみのこれり。今かの見たばかり高根の花の土人形は、來山の自記と共に、その末流なる河内八尾の某方に秘藏せられをりとか。

五井持軒墓 (享保)

天滿寺町九品寺にあり。篆額は、『持軒五井先生之墓』と記し、撰文は、伊藤東涯の筆にして『……寛永八年辛巳二月二十二日、生于大阪……享保六年辛丑閏七月十八日歿于家……先生諱守任字加助號持

軒系出于左大臣魚名……』とあり、四書屋の加助と綽號せられて、殊に四書に精通したりしは、この人なりき。

紙治小春墓 (享保)

網島の大長寺の門内東側にさゝやかなる板屋根をかまへ、その下に、一つの石佛を安置し、臺石の表に、二人の法號をゑれり。法號は、『釋了智、妙春信女』といふ。今は、石缺けて、了智の二字、明かならず、(石の置處、今は、また西の方に移れり、委しくは、秋渚が前年物したる『この花一枝』にしろしたれば、參看すべし。)二人の書置は、のべがみ二枚に認めて、享保七年寅十月十四日の夜十夜回向の折から、寺内において、自滅するよしをいへり、此書、今も

猶寺に蔵せり。傍に鯉塚もあり。

近松門左衛門墓 (享保)

墓は、谷町寺町の法妙寺と攝州久々智村の廣濟寺との両處にのこり、その墓石ともに、同質同形にて、さゝやかなる自然石に、『阿耨院穆矣日一具足居士、一珠院妙中日事信女』と夫妻の戒名を、二行にゑりつけたり。法妙寺は、近松氏代々の墓所にて、右の外に同家累代の墓石一基、本堂の裏手にあり。廣濟寺なるは、斯翁晩年よりありて、寺島の尼崎屋吉左衛門がりに退隱してありしに、尼崎屋の倅、出家して、釋號を、日照とよび、當山を建立し、翁亡くなりてのち追善營ひとて、境内に墳墓をまうけたるなりとぞ。兩寺とも

、過去帳に、近松夫妻の法名を載せ、朝夕の追善今もおこたらず。

歿年は、享保十九年十一月二十一日にして、享年七十二とぞ聞ゆし。

鯛屋貞柳墓碣 (享保)

新清水西阪の下に在り。こは、貞柳が二十五年忌(寶曆八年八月)に一本亭芙蓉華の建てたるにて、墓誌は、林孝徳の文なり。また辭世の狂歌、

百むてもおなじ浮世に同じ花

月はまん圓ゆきはしろたへ

をゑりつけたり。貞柳は、享保十九年八月十五日に歿して、年八十一なりき。その埋葬地は、天下茶屋村に残れり、といふ人あれど、

南齡みなねのものしたるなり。

紀海音墓(寛保)

八丁目寺町寶樹寺の本堂南側南向きに、立ちて、鯛屋累世合葬の墓なり。法名を、清潮院海音日法といふ。海音は、油煙齋貞柳の寶弟にして、寛保二年十月四日、八十歳にてみまかりき。

中井發庵墓(寶曆)

右と同じ寺町誓願寺本堂の西にあり。碑の正面には、「發庵中井先生之墓」とありて、その他には、文を刻り。文は、白井蘭洲の作にして、書は、三宅春樓(萬年の男)の筆になれり。發庵諱は誠之、字は叔貴、通稱は、忠藏といへり。播州龍野の産なり。大阪に出で

て、懷徳書院を興し、人なり。寶曆八年六月十七日歿しき。年六十六。中井一家の碑中、文を刻せるは、發庵のはがりなり。

松木淡々墓(寶曆)

難波瑞龍禪寺(俗に鐵眼寺といふ)の厨房の南手にあり。大きな自然石には

高源朝水居士墓

寶曆十一年辛巳冬十一月二日卒(以上面)

半時庵淡々得齡八十八(背)

淡々の後は、絶たれたれど、門人舍棒の文几をつげるもの、代々ありて、今猶八千房流美と稱して、田蓑橋の南に住り。流美も、既に

永富獨嘯庵墓 (明和)

上の宮の藏鷲庵にあり。表に『處士獨嘯庵墓』と題し、裏には、撰文あり。次にこれを節略す。

永富鳳、字朝陽、號獨嘯庵、長門赤間關人……少壯周游四方……多藝多通……明和丙戌三月五日、客死于大阪、年三十五……著有囊語五卷、漫遊雜記、吐方者……筑前龜井鑑處靜誌、浪華篠應道書、

猶この外、徽瘡口訣一卷あり。本邦製糖の率先者たり。

並木正三墓 (安永)

千日前の法善寺の墓所に、北向けて、立てられたり、「名物なにはの

ながめ』には、奇形の碑の一つに數へたるが、その据ゑどころ、昔にかはれるにや、臺石も他のを借れるもの、如し。碑の長さ二尺に足らず。方柱形にして、前後左右皆漢文を刻して、正三が一代の略歴を記せり。前面に、『南無三寶正三之墓』と刻し、歿せしは、安永二癸巳二月十七日なりき。その文を摘録すれば、

並木正三、其父曰正作、雲州人、破産、提家移大阪……正三病向死、大小劇子相集看病、惜不可救、當是日、劇長中村歌七告之曰、亡之命矣、請覺焉、正三即嘆曰、南無三寶、南無三寶、乃唱歌一首而終……死登見世不死遠作能花登見之爾身乃散果乃

何曾不似希流

笹瀬散人撰
大手道人書

正三が狂言作者として、劇部にたてられたる事蹟は、小説史稿にのづりて、こゝには、いはず。

大畠黙翁墓 (安永)

生玉寺町玄徳寺にあり。題表の『黙翁大畠君之墓』も、碑文の撰書も、皆中井竹山が一筆になれり。裏面の文は、

君諱一利、字貞卿、號梅塙、稱治部左衛門、大阪府人……學梁田悦巖……悦巖集中、十二仙詩、有梅塙春傳浪華香句、即粹君也……旁好茶禮俳諧、晚入禪、與諸名衲交、號默翁……安永

四年五月十四日歿、壽七十三……

河野恕齋墓 (安永)

下寺町光明寺墓地の東手、藪の側にあり。正面に『河野恕齋先生墓』と題し、裏に、藪孤山が長文を刻せり。恕齋諱は、子龍、字は伯潛、別に鶴皋、南瀨など號せり。岡白駒の長子にして、混沌詩社の巨擘たり。年三十七にして、安永八年二月九日に歿せり。傳の悉しさは、先哲叢談續篇にあり。

葛子琴墓 (天明)

天満寺町栗東寺にあり。題して『本齋庵葛先生之墓』といふ。碑文に、……君諱張、子琴其字、号森庵、橋本氏、葛城爲本姓、家世業